

清流

題字：芳野 充

令和4年3月30日
第63号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

小を積んで大と為す

品性豊かに生きるための「二十の徳目」も最後となりました。二十番目の徳目は、「正義感」です。「正義感」とは、道理に反することがあれば、そこに立ち向かっていく気骨をいいます。道理とは、人としての正しい道です。

正義といえば、強きをくじ弱きを助けるかっこいいヒーローを彷彿とさせるわけですが、わたしの頭にうかぶヒーローは、素朴ですが信念がよく、無骨ですが人情味を感じられる、戦乱のアフガンスタンで用水路を掘り、六十五万人の生活と命を救った中村哲さんです。さんねんながら中村哲さんは、アフガンスタンで二〇十九年十二月四日に武装集団におそわれ、命をうばわれました。

アフガンスタンで井戸や用水路を掘り始めたいきさつは、一九八四年にパキスタン北西部ペシャワルの病院に赴任したことからはじまります。その後、戦乱に追われたアフガンスタン難民の苦境を知り、両国で診療所を展開していきますが、転機は二〇〇〇年にアフガンスタンで起こった大干ばつ。さらに追い打ちをかけたのが、テロとの戦いによる米軍などの空爆でした。飢えと渴きの犠牲者のおおくは幼児。やむにやまれず土木の勉強を独学で一から始め、井戸や用水路を掘り始めました。結果、福岡市の面積の約半分にあたる土地を潤わせ、六十五万人の生活と命を救ったのです。

「オレは行動しか信じてない」「道で倒れている人がいたら手を差し伸べる。それは普通のことです」とは、中村哲さんの言葉。人として正しい道であれば、暴力や権力に屈することなく立ち向かい、弱きものを助けたいというつよい信念が行動となり、周りの人をも巻き込みおおくの命を救った中村哲さんは、正に正義感のかたまりのような人だと思っております。

わたしは、と言えばなかなか普通のことでもできず、それゆえ行動にもうつせていない場面が多々ありますが、まずは自分ができる小さなことからでも、行動にうつしていきこう、そうつよく思わされます。それは家族に対して、スタッフに対して、また身近なまわりの人や地域に対して、不快さを与えない行動であり、安心とよるこびを与える行動です。

小を積んで大と為す。わたしの好きな二宮尊徳の言葉です。小さな努力をこつこつ積み上げていけば、いずれ大きな発展に結びつくと思っております。これからも自己を磨いていく努力を続けてまいります。

加来 寛

